

ミステリ読書案内

2022. 10. 14 発行元

第406号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

知念実希人「生命の略奪者」

9月に新潮文庫 nex から『天久鷹央の事件(推理)カルテ』シリーズの第13弾となる『生命の略奪者』が出た。人気の医療ミステリである。帯には「累計190万部突破!」と書かれている。その最新作の内容は…。

臓器移植をテーマに

シリーズ初期の頃は医学的な知識を前面に出した組み立てが中心だったが、最近は長編形式が多くなり、より物語性重視に転換してきている。病院内での天久鷹央、小鳥遊優、鴻ノ池舞などの配役・位置取りが安定してきたことも関係しているかも知れない。

今回は臓器移植がテーマ。ドナーから提供された臓器をコーディネーターが輸送中に強奪されるという事件が連続して起きるといふもの。天医会総合病院の場合は腎臓を奪われてしまうことになる。

臓器はどこへ行ったのか

最初の謎は、奪われた腎臓がどこへ消えたかということ。夜の駐車場で取られたことが判明しても、門には警備員がおり、防犯カメラには何も写っていない。病院の外に持ち出されていないように見えるのだが。

解決策を提案するのは鷹央。そして、持ち出された方法は解明されるのだが、臓器そのものの行方はわからないまま。ここから先が本書の中心部分になってくる。

通常ならば、臓器は別のルートに乗って秘密の移植先に移動するはずなのだが、時間的な制約や、冷却ボックスなどの保存方法で疑問が残る。単なる移植の失敗を目指したものでないらしい…。

二重の仕掛けがある展開

中盤過ぎに一度クライマックスの場面があって、結末に行き着いたように見せ掛けておいて、実はその先にもうひとつの仕掛けがしてある。こういう展開が実に知念ミステリらしいところだ。

最後に暴かれる新たな人間関係は少々強引すぎるかなとも思うが、ドッキリを作り出すには有効な手法。まあ、そこに来るまでにある程度の伏線は散らばしてあるので。

《天久鷹央事件カルテ・シリーズ》

1. 天久鷹央の推理カルテ
2. ファントムの病棟
3. 密室のパラノイア
4. 悲恋のシンδροーム
5. 神秘のセラピスト
6. スフィアの死天使
7. 幻影の手術室
8. 甦る殺人者
9. 火焰の凶器
10. 魔弾の射手
11. 神話の密室
12. 久遠の檻
13. 生命の略奪者

いずれも新潮文庫 nex から出ている。多くの新刊書店の平台に並べられる人気シリーズ。

ということで今回も楽しませてもらった。臓器移植は現実社会の中でも今後大きな課題となっていくだろうと考えられる。「脳死」の問題なども含めて。

次作に期待する部分として

私は「本屋大賞」向けよりは「本格ミステリ大賞」向けの作品を期待している。その意味で昨年の『硝子の塔の殺人』は私にはピッタリの内容だった。知念には「本格ミステリ」を書く実力が備わっている。是非次の傑作をお願いしたい。

浅倉秋成「六人の嘘つきな大学生」

昨年3月角川書店。『このミス』ランキング第8位のベストセラー作品。長い間取っておいたのだが、一年以上経ってようやく手を出して読み終えた。評判の本を読むのは恐ろしさが伴う。次作の『俺ではない炎上』(双葉社)が出ているというのに…。

「就活」でのグループディスカッションという物語の設定の素晴らしさが全てだよなあと思う。六人の学生の人物像、そして話し合い場面の真に迫った内容があまりにもリアルな描写で、最初から引き付けられてしまう。私は公務員で過ごしてきて、一般会社を考えたこともない人生だったので、今の若者の過酷さに圧倒されてしまう。こんなにも積極的に話を構築し、大げさな行動を展開しなければ「内定」を得られないのか…と可愛そうになってしまう。学校から子どもたちを送り出すために数々の面接練習に付き合ってきたけれども、本書で描かれた就職試験は桁外れのものに見えてしまう。そして、苦労の末の結果も、『相手の本質を見抜くなんて、絶対に百パーセント、不可能です』という元人事部長の言葉は真実だと思っている。

IT企業のスピラリンクスの新卒採用。五千人希望者の中から最終選考に残った六人。最初はディスカッションの内容次第では六人全員内定のはずだったのに、突然「内定は一人だけ」との通告。今まで仲間に見えていた人達が敵に変身。個人の過去の隠し事を暴く告発手紙が登場して、緊迫感が跳ね上がる。そして、第二部に当たる八年後の物語も、なるほどと思うことの連続。「そうかそういうことか…」最後に付け足されているエピソードも秀逸。ほっとした気持ちにさせられる。多くの人にお薦めしたくなる作品だ。

昨年3月角川書店。『このミス』ラ

ンキング第8位のベストセラー作品。長い間取っておいたのだが、一年以上経ってようやく手を出して読み終えた。評判の本を読むのは恐ろしさが伴う。次作の『俺ではない炎上』(双葉社)が出ているというのに…。

「就活」でのグループディスカッションという物語の設定の素晴らしさが全てだよなあと思う。六人の学生の人物像、そして話し合い場面の真に迫った内容があまりにもリアルな描写で、最初から引き付けられてしまう。私は公務員で過ごしてきて、一般会社を考えたこともない人生だったので、今の若者の過酷さに圧倒されてしまう。こんなにも積極的に話を構築し、大げさな行動を展開しなければ「内定」を得られないのか…と可愛そうになってしまう。学校から子どもたちを送り出すために数々の面接練習に付き合ってきたけれども、本書で描かれた就職試験は桁外れのものに見えてしまう。そして、苦労の末の結果も、『相手の本質を見抜くなんて、絶対に百パーセント、不可能です』という元人事部長の言葉は真実だと思っている。

IT企業のスピラリンクスの新卒採用。五千人希望者の中から最終選考に残った六人。最初はディスカッションの内容次第では六人全員内定のはずだったのに、突然「内定は一人だけ」との通告。今まで仲間に見えていた人達が敵に変身。個人の過去の隠し事を暴く告発手紙が登場して、緊迫感が跳ね上がる。そして、第二部に当たる八年後の物語も、なるほどと思うことの連続。「そうかそういうことか…」最後に付け足されているエピソードも秀逸。ほっとした気持ちにさせられる。多くの人にお薦めしたくなる作品だ。